

青春の汗流す援農

青森市にある青森中央学院大学の援農サークルenは、東北町での農作業アルバイトをはじめ、地域の伝統野菜である

毛豆の消費拡大を狙う「毛豆プロジェクト」などの活動を通じて、学生らが楽しみながら農業に汗を流している。

青森中央学院大 東北町の体験を機に発足



ダイコンを収穫する援農サークルメンバーら

同サークルは、学生の農業支援をマネジメントすることを目的に2018年7月に発足した。東北町と包括連携協定を結んでいる同大学では、上北地域民局が主催した1泊2日の援農モニターツアーに経営法学部の学生が参加し、農業を体験。そのうち7人の学生が「もっと農業をしたい!」と声を上げ、同サークルを立ち上げた。今では同校の看護学部や青森中央短期大学の学生も巻き込み、総勢30人の人気サークルになっている。

伝統の毛豆振興も一役

青森と連携。農繁期の貴重な労働力として活躍する。「毛豆プロジェクト」は、学生らが育てた毛豆を使い収穫祭や料理体験会など、地域住民が参加できる企画を行っている。

20年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で実施できなかったが、代わりにダイコンや青森市雲谷地区の伝統ソバ「雲谷そば」を30坪ほどの休耕地を借りて栽培し、営農力を高めた。毛豆については今後、オーナー制度を利用した販売事業の展開を予定している。

サークルに参加する同大学2年の石塚さんは「重労働で大変という、今まで農業に対して持っていたイメージがガラッと変わった。農作業を通して生まれる人間関係や、農作物を作る過程に触れることができるのはとても大きい。これからは、自分たちの活動を県外にも発信していきたい」と、今後の活動に対して意気込みを語った。

(青森・青森)